

アンドロイドに性交を学習させる為に派遣された男

## ■ 内容

アンドロイドが人口の大半を占める未来にて。

アンドロイドだけが通う女子校に、人間の太郎が単身で編入させられる。

これには、アンドロイドに「恋愛」を学習させるという目的があった。

恋愛がしやすいように、あらかじめ太郎に対するアンドロイドの好感度は最大に設定されているという。

恋愛経験がゼロの太郎は、期待と不安を胸に意気込むのだった。

なお、プロジェクターには太郎に伝えていない、もう一つの狙いがあった。

寧ろ、そっちが本腰と言って良い。

それは、アンドロイドの性的技術の向上。アンドロイドの Hentai 市場の進出を目論んで男性を徹底的に悦ばせられるように、そうした経験を太郎で学習させたい想いがあった。

太郎はまだ知らない。アンドロイドの「性欲」も過剰に設定してあることを。

可愛い子ばかり。それら数千体が再び太郎に恋しており、太郎も興奮を覚える。



## ■第一話 生徒会長&校長の誘惑

人類が宇宙進出を果たして暫く。既に、火星には永住型コロニーを建設しており、汚染の進んだ地球は、人口の大半をアンドロイドへと置き換えていた。

環境破壊が末期に達した際に、再生計画でアンドロイドが派遣された次第である。もう人間が住んでも問題ない程度には改善されたものの、依然として比率は偏っていた。

アンドロイドは外見的には人間とほとんど区別が付かない。肌の質から、言葉も流暢で肉声と紛う程に感情が載っており、開発者は徹底して人間に拘ったのだ。

いまとなつては内部的にも遜色ないとされる。高度な人工知能が搭載された上で、自己学習能力を持ち、感情の模倣さえも可能とする。

しかし、真の人間的感情。特に複雑な恋愛感情を理解して、それを表現する点は、未だアンドロイドにとって難しい課題だった。

そして、ある実験的な取り組みが始まる。

アンドロイドだけが通う学校に、一人の人間の男子を転入させるのだ。

目的は、異性のアンドロイドと接触して恋愛感情を学習させること。

大役を担うことになったのは、一般家庭に生まれた普通の男子。佐藤太郎だった。

太郎は、この任務に選ばれた理由をよく理解していなかった。

彼は特別な才能があるわけでもなく、むしろ平凡な高校生と言って良い。

しかし、彼の「普通さ」こそが、この実験には最適だと判断されたという。

「太郎君、準備は良いかな？」

送迎用の自動運転車の中。太郎の横に座った中年の男性が声をかける。

彼は鈴木博士。この実験を主導する科学者の一人だった。

「はい……たぶん」

太郎は、不安を露わに少し緊張した様子で答えた。

「ははっ、なにも心配することはないよ。君はただ、普段通りに接すればいいんだ。

アンドロイドたちと交流し、彼女たちと楽しく学校生活を送る。それだけさ」

太郎は黙って頷いた。

しかし、内心では不安が渦巻いていた。

全校生徒、教師、用務員に至るまでが女性型アンドロイドという環境にて、どう振る舞えば良いのか。アンドロイドとの恋愛にも不安は尽きない。

視線を落として思い悩む太郎に、飽くまで博士は楽観的な様相だ。

「このプロジェクトは、世界各地で行われている。別に、君が失敗しても、大して問題とはならない。遊び感覚とまで言うては流石に良くないけど、お愉しみもあるかもしれないんだから。君は若いし、夜の方も充溢してるのだろう？」

「えっ？」

「恋愛の行きつく先に、肉体的接触は必要不可欠だ。従来のアンドロイドに性器の取りつけは禁止されていた。お陰で闇市は違法に性器を着けられたアンドロイドで蔓延している。そこで漸く政府も気付いたのだろう。近年から、アンドロイドとの肉体的接触は合法となり、そうした目的の営利販売も可能となったのだ」

「……………」

「いまから赴く女子校では、全てのアンドロイドに性器が取り付けられている……ッ！」

「機会があれば、彼女たちの気持ちを遠慮なく受け止めてほしい」

「あ、あのっ……………」

初出の情報である。

だから、反応を少し楽しみにしていたというのに、この話を聞いて太郎は余計に不安な表情を強くする。怪訝な顔をする博士に、太郎は理由を重く明かした。

「実は、自分は童貞で。本当に今更で申し訳ないんですけど、恋愛経験すら一度も無くて。本当に、すいませんっ。恋愛感情を学習させるプロジェクトなんて務まりませんッ。い、いまからでも辞退って可能でしょうかっ？」

太郎は泣きそうな顔を浮かべており、博士はポカンとしていた。

あらかじめ行われた検査にて、太郎の生殖力の強さを知っていたからだ。

顔も悪くないし、きつとお盛んな毎日を送っているのだろう。

なら、これから太郎に巻き起こる、数千体ものアンドロイドたちによる、怒涛の誘惑の日々にも耐えられる筈だ……なんて思っていたのに。

少し間を置いて博士が大きく笑う。

「ははは、ずっと沈んでいたけど、そんなことで悩んでいたのかね？　大丈夫だよ。君が人間の男であれば、それで十分なんだ。極端な話を言えば、例え君が暴力的で非人道的な人間だったとしても構わない。つまり、そうした人間のデータが取れる訳だからね。恋愛経験が皆無。寧ろ、良いじゃないか。そうした存在こそ貴重だよ。だから、気にしなくて良い。君にとっても良い経験になる筈だ」

「あ、はは。そう言ってくれて本当に救われます。ありがとうございます」

「ただ、私からアドバイスを一つ。アンドロイドとはいえ女性だ。あんまり、恥を欠かせちゃあいけないよ？　据え膳を喰わぬは、なんとかだろうからね」

「……………」

車は静かに走り続け、やがて目的地に到着した。

「未来都市女子校」と書かれた門をくぐると、近未来的な校舎が姿を現した。

「さあ、到着だ」

鈴木博士が太郎の肩を軽く叩いた。

「頑張ってくれ」

肩を叩かれた太郎は深呼吸をして車を降りた。

校門の前には、制服を着た女子と、スーツを着た女性が整列して待っていた。

学校の責任者と、学生の代表なのだろうと直感させる。全員がアンドロイドだと思ふと、改めて緊張感が駆け巡った。

「初めまして、佐藤太郎さん」

前に立った一人の女子が、にっこりと微笑んで挨拶する。

「私は生徒会長のアヤノです。みんなであなたの到着を待っていました」

そういい、人間らしい呼吸でお辞儀をする。この二人はアンドロイドじゃないと言われても絶対に信じてしまう精巧ぶりである。

いや、そんなことは無いかもしれない。

なんせ、あまりに容姿が完璧すぎる。人間では有り得ない整いすぎた完璧な容姿。アンドロイドが普及した近年では、容姿も限りなく人間に近付けたタイプも多く存在する。けど、この二人の容姿は、人間では決して実現しないレベルで非の打ち所がなく作られていた。

この二人だけじゃない。すぐに分かる話。この女子校に在籍するアンドロイドは、全員が完全完璧な容姿で作られているのだ。

美しすぎる二人に、太郎も動揺を隠せない。緊張しながらも、出来るだけ自然に振る舞おうと努める。ただ、気恥ずかしさで目は合わせられなかった。



「よ、よろしくお願いします」

握手。手が触れた瞬間、アヤノの額に汗が浮かび、頬を仄かに染めていった。その様子を見た博士は、「太郎君、ゆっくり愉しみたまえ」と言って場を去る。遂に一人つきりになった太郎に、今度はスーツを着た女性が近付く。

「校長のマユミです。よろしくお願いします」

続いてマユミとも握手を交わす。手を握られた途端、マユミに変化が起こる。

「あ、あああ……これが男性の感触なのですね。なんて魅惑的なんでしょう♥」

「え、マ、マユミ先生？ 大丈夫ですか？」

アヤノと同様に、或いはそれ以上に赤面して、恍惚の笑みを浮かべる。外観では分からないが、マユミはアヤノより何世代も前の旧型なのだ。

もう百年以上も生きている。

それでいて、これが初めての異性との接触であり、感極まって全身が悦んだのだ。太郎は知らない。

この女子校に存在する全てのアンドロイドが常に発情した状態にあることを。そして、太郎への好感度が最大値に設定されていることを。

手っ取り早く性交の学習をしてもらう為に……

「では、行きましょう」

太郎の手を取り、アヤノたちが校内に誘う。

「あつ……」

自然と手を繋ぐ形になる。異性と手を繋いだのは、これが初めてだ。お互いに。

太郎の鼓動が早くなる。

アヤノは、この時点で既に局部をジンジンと胎動させていた。

廊下を歩きながら、アヤノが学校の概要を説明する。

「本校は、アンドロイドの感情教育に特化した施設です。私たちは、人間らしい感情や行動を学ぶために日々努力しています」

太郎は周りを見回した。

「う、あ……」

歩を進めるに連れて、大勢の女子が太郎の妨げにならない程度に集まってくる。

太郎が校舎に現れると、聞きつけた女子群が一斉に巣穴から飛び出す蟻のように、あつという間に廊下の空間を埋め尽くした。肩が触れ合い、腕が絡み合い、まるで一つの生き物のように蠢いている。窮屈さを全く気にする様子もなく、大興奮した面持ちで太郎へと集まっていた。

一つの巨大なパズルが完成したかのような、不思議な一体感を醸し出している。それでもちゃんと太郎の為に道を作っている。廊下の中央に細い道だけを残して、

左右に開いた花道を歩く太郎は、まるで世界的ロックスターの凱旋のだった。

「ねえ、太郎さんよ！ やった。本当に来たんだー！」

「きやあああー、格好良いッ！」

「ヤバあ……太郎さまーっ、視線くださーい！ きやあああー！」

黄色い悲鳴が降り注ぐ。狂喜の如く女子たちが傾倒する。

しかも、全員が完璧な容姿。まるで彫刻のような美しさだった。

透き通るような白い肌、吸い込まれそうなほど深い瞳、艶やかな黒髪、黄金比で

構成された顔立ち。見る者を一瞬にして魅了し、息を吞ませる程の非現実的な容姿。

密集する一体一体が、そんな容姿をしており、太郎は戸惑いを隠せなかった。

可愛すぎる。綺麗すぎる大勢が太郎に愛を叫んでいる。

その声の一つ一つに股間が反応してしまう。歩きながら太郎は顔を真っ赤にして

僅かに前屈みになり、アヤノとの手を外すのだった。

博士と車に乗っていた時が懐かしい。既に太郎は、冷静さの欠片も無かった。

手が外れたアヤノは一瞬だけ寂しい顔を浮かべる。

軽く咳払いをすると、周りの生徒たちを制した。

「皆さん落ち着いて。太郎さんも緊張しているんだから、あんまり騒がないように。

太郎さんを困らせたくないでしょう？」

「は、はい、ごめんなさい、太郎さん……」

「太郎さんの負担にはなりたくありません。教室に戻ります……」

「いつか、お話が出来れば良いなあ。その時は、目いっぱい尽くしますね！」  
なんて口々に言い、女子たちの喧噪は止まった。

太郎はアヤノに感謝の眼差しを向ける。アヤノは、満面の笑みを返した。

「ふふ、凄い人気ですね。太郎さん♥」

「い、いやあ、覚悟はしてたけど、いや、その、凄いですね、やっぱり……」

「皆さん、太郎さんが来るのを待ちわびていましたから。先生方までも」

「あ、あの。みんなのス、スカート……短すぎないでしょうか……？」

そして気になる点。それは、女子たち、延いては教師までもスカートが短いこと。  
初めの、アヤノとマユミの時点でドキッとはしていた。

丈が20cmくらいしか無いような、歩くだけで中が丸見えなくらいに短いのだ。  
アヤノのプリーツスカート、マユミのタイトスカート……どちらも目のやり場に  
困っていた。ドギマギしつつも黙っていたが、先程の女子たちも同じく白の下着を  
見せつけるかのようなウルトラマイクロミニスカート仕様であり、童貞の太郎には  
あまりにも刺激が強すぎた。

赤い顔で指摘する太郎にアヤノが笑う。

「ふふ、昨日までは、皆さんも膝丈の長さだったんですよ？」

「えっ？」

「私も、今朝にスカートを調整しました♥」

「な、な、なんで……」

「そんなの、分かっているでしょう？」

話ながらも太郎は、気付けば職員室に到着していた。

もう、周りに騒がしい女子生徒は居ない。人気のない場所になり、急にアヤノは太郎との距離を縮める。職員室に鍵を掛けて、太郎の胸板に顔を埋める。ほんのり女子の匂いが漂い、流石の太郎も空気を察した。

「な、なにをするの……？ も、もうすぐ授業が始まっちゃいますよ？」

「情報通り、太郎さんは本当に優しいのですね。でも、もう私は限界なのです」

博士の言葉に、多少は備えていたものの、あまりにも展開が早すぎる。

不意を突かれた逆セクハラに、太郎の顔が真っ赤になる。

「あ、あの……その……」

「ふふ。お察しの通りです」

そしてアヤノは、太郎の股間に優しく手を添えた。

「あっ！？」

ビクビクンッ！

ズボン越しに伝わる手の温もりと感触。童貞の太郎には刺激が強すぎた。

ただ触れただけでも大きく身体が跳ねる。腰が引けて思わず顔を離そうとすると、アヤノが両手を頬を添え、グイッと自らの唇へと引き寄せていった。

「んっ！」

生まれて初めて異性？に股間を触られたかと思えば、その一秒後にはキスである。しかも、相手は絶世の美女。

まるで名画から抜け出してきたような顔立ち。凜とした眉は、意志の強さを表す実直さがあり、長い睫毛が優美なる影を落とす。鼻筋はスツと通っており、上品で日本人離れの印象を与える。唇は、バラの花びらのように柔らかく、ほんのり赤く色づいていた。

点数にして百点。人間では絶対に有り得ない完璧な容姿。

そんなアヤノの唇は蕩けるように柔らかく、太郎の唇へと食らいつくように覆い被さり、入り込んできた舌先は、甘美に絡んで淫らな愛撫を与えていく。アヤノの、過剰なまでの量の唾液。臭い、味、法悦感。人間そのもの。太郎の口へと流れ込み、やがて食道を通過して体内に消化された。

「あああ、あっ……」

初めてのキスは、脳髓を甘く麻痺させる程に蕩けそうな唾液の交換だった。

あまりの出来事に、太郎は抵抗も出来ずになすがままにされる。アヤノの舌技に翻弄され、股間を触られながらのキス。太郎には刺激が強すぎて、この一撃だけでもう理性や道德観は完全に剥がれていった。

ただ、されるがままに身悶えるのみ。ズボンの中でビクンビクンと膨らむ肉棒。

それに合わせた動きでアヤノが密着してくる。上から見下ろさなければパンツが見えてしまうくらいのミニスカート。上向きに膨らむ股間がスカートを押し上げて、アヤノの下着と密着する。擦れる。

これまた人外の愛液の量。太郎のペニスを感じた瞬間、アヤノがアクメの呻きを漏らしながら、恍惚に塗れて体液を放出する。博士の意地悪によって、この学校の全てのアンドロイドは、太郎のペニスに触れた瞬間にオーガズムへと達するようになっているのだ。

こうして擦られていく中で一秒ごとに絶頂を繰り返すアヤノ。一分も絶たずに、顔は淫猥に蕩けきっていた。

「あ、はあ……♡ 太郎、さまあ……♡ 大好き、ですう……大好き……」

「う、そ、そんな、会ったばかりでしょう……いきなり、そんなことには、な、な、ならない、でしょうっ、い、いくらなんでも、めちやくちやですっ……」

「なにも不思議なことはありません。太郎さまの資料を受け取った時点で私は一目惚れしていたのです。何日も前から、私は太郎さまの顔写真で何度も何度も自慰を繰り返していたのですから……生徒会長の特権ですね♡」

更にアヤノの手が伸びる。太郎の股間を摩り、摩って、扱きあげていく。

手さばきは、処女には到底思えぬ慣れた動作であり、絶妙な手つきだけで太郎を快樂の淵へと落とし込んだ。

やがて、太郎の腰が震え始める。再びキスをしながらアヤノが絶頂を味わう。ワイシャツは汗でびっしょり張り付いており、露わになった胸元からは、まるで熟れすぎた果実のように甘酸っぱい匂いがした。

「う、あああああつ、こ、このままじゃ、イ、イツちやうつ、うううつ！」

「あああ、太郎さま。大好き、大好き、大好き、イッて……私のキスや手でイッて貰えるなんて幸せ。もう死んでも良いくらいですう♥」

白く細い手と可憐な舌が太郎を刺激する。温かい唾液を飲み込むように促されて、同時に口内を甘い熱で犯されていく。目視だけは、その鮮やかすぎる桃色の柔肌に向けつつも、未知の快楽に思考回路がショートする。とうとう限界を迎えた。

ズボンの中に熱いものが迸って太郎の腰が震える。

その震えに合わせて、アヤノは優しく手を上下させた。

いよいよ達するという時。太郎は、周りに居る他の存在へと漸くと気付いた。

「う、わっ、マ、マユミ先生ッ？ い、いつから居たんですかッ？」

「ずっと居たわよ。二人だけの世界に入っちゃって、やっぱり男性は年増に興味は無いのかしらねえ……」

「そ、そんなことはっ！」

呼吸困難になり、アヤノから唇を離した太郎。視界が開けると、アヤノの後ろに校長のマユミが立っていたのだ。



別に、隠れていた訳じゃない。正門から、ずっと太郎に付いてきていたのだから。緊張しすぎて周りが見えなかっただけである。

そしてマユミもまた、太郎とアヤノの行為を目前に、恍惚とした表情を浮かべている。瞳は潤んで頬は紅潮。短すぎるタイトスカートからは、ポタポタと女性液が垂れていた。

「太郎くん、私のことも忘れないで。私だって太郎くんのこと、資料を受け取った時から愛しているのですから。生まれて数百年……初めて恋をしたの……♡ ああ、太郎くん、太郎くん♡ 大好き、大好き、太郎くんの為なら、命だって捧げますっ、あああ、私も、キスを……♡」

「あ、あああああああつ！」

マユミも淫らなキスに加わる。左側から、アヤノが太郎を離さないように密着し、右側からマユミも太郎に抱き着く。童貞の太郎は、二人の豊かな乳房の感触だって味わいの……強すぎる刺激が束になって押し寄せてくる所為で心も身体も快感を処理してくれなかった。

二人の美女の舌先が太郎の口内を蹂躪する。唾液の量は二倍である。

アンドロイドの唾液には媚薬効果でもあるのだろうか？

喉に通す度に、全身が快楽で熱く燃え盛る。唾液だけでも並の男なら射精しても可笑しくない。それ程の蠱惑性があったのだ。

「うあつ、あああああああつ！」

しかし、選ばれし太郎も既に限界である。

訳が分からず、頭の中は脳汁で氾濫する。膨らむ股間は制服を突き破りかねない程に大暴れしており、それを抑え込む二つの肉感。アヤノに加えてマユミの股間も擦り付けられていく。

疑似セックス。股間と股間を密着させ合いながら、二人は犬のように腰を何度も上下に振り続けた。テントに、濡れた白い下着でスリスリ、スリスリと……何度も、何度も。キスと唾液と愛の囁きを繰り返しながら……

「好き、好き、大好き、大好きです、太郎さまあ……♡」

「大好きです、大好きつ、太郎くん。ああ、そんな真剣な顔をして、はあ、なんて可愛いのでしょうか……♡」

全身が焼かれる程の灼熱に見舞われながら。太郎が雄叫びを上げる。

「ああああああーッ！」

執拗な疑似セックス責めで身体がピクンピクンと痙攣する。ズボンにジワジワと広がる生温かい感触。太郎のズボンが大きな染みで濡れていく。

そして……

「ううっ、あああああああつ、んむっ、んんんんんんんんっ！」  
ズボンの中で大爆発を起こしたのだった。

最後の最後、二人に唇を押さえ付けられながら……

ビクビクビクビクビクッ！

ボダボダボダボダッ！

当然ながら、童貞の太郎にとって史上最高の快楽である。

一瞬、意識が飛んで倒れかけるも、最後の一片で踏ん張りを利かせる。

僅かに残った男としての矜持。気絶する訳には行かない……なんて思ったものの、

当の二人が既に遠い世界へと堕ちていた。

マユミとアヤノ。下着の隙間から零れる異常な量の体液。

透明液と黄金液。

二人は失禁しながら、潮を撒き散らしていたのだ。

潮吹きを体感したアヤノとマユミ。淫らに身体をくねらせて享楽に潰える。床に

倒れ込んで、何度も股間を痙攣させて、白目を剥いて失神していた。

これが、転入して十数分の出来事である。

「こ、これから、どうなっちゃうんだ……」

唇が震えている。

しかし、それは不安や恐怖によるものではないと、股間の猛りが証明していた。